

140. 「釣り四話」 後編

技術戦略部次長 圓谷 秀夫

第参話「江戸時代の釣り」の話

戦国から江戸の時代となり、家康は葦が茂る広大な湿地であった江戸の都市改造を行いました。利根川の河道変更もありましたが、埋立てによりそれまで湿地帯で捕捉されていた栄養源が多く供給されるようになり、江戸湾は魚貝類にとってますます良い生息環境になったと考えられます。絶好のフィールドを眼前に、天下泰平の世になれば、大名や旗本などの武士階級の中から“趣味としての釣り”が誕生したのも当然です。手にするものを刀から釣竿に変えたと言うところでしょうか！やがて、武士から町人や女性まで、さらに江戸から地方へと釣りの文化が発展成熟していきます。釣れた魚は、鱧(キス)、鯊(ハゼ)、鰈(カレイ)、鱸(スズキ)、鮠(コシロ)等多様で、海苔も多く採れたとのこと。

五代綱吉が発した「生類憐みの令」では、犬や猫を殺生してはいけないだけでなく、釣りも禁制となりました。当時、隠れて釣りをしていたのか、リリースなら良かろうと思っただのか判りませんが、一時期釣り文化が停滞しました。

ところで、庄内藩(現在の山形県の日本海側で酒田市や鶴岡市等)では、なんと、釣道(釣道)を藩の武芸として奨励していたそうです。日本海に面する磯の黒鯛釣りに使用する“庄内竿”が生まれたほどです。私は、若い頃鶴岡市に在住していたことがあります。当時は釣りに関心のない時期で、黒鯛釣りをしなかったことを今更ながら後悔しています。

蛇足ですが、クラゲで有名な加茂水族館があるのはこの庄内・鶴岡市です。

最終話「黒鯛つまりチヌ」の話

黒鯛～釣り師の憧れ、これにハマってしまった人は数知れず。日本全国に棲息しており、地方によってはチヌ、チン、カイズ、ババタレ、チンチンとかいろいろな呼び名で呼ばれています。腹鰭(ヒレ)や尻鰭、尾鰭の先端が黄色になっている種もあり、キビレチヌと区別して呼んでいます。

黒鯛の幼魚時はオスとメスがいますが、成魚の多くはメスに、つまりオスから性転換します。一時話題になった内分泌攪乱物質(環境ホルモン)の影響ではなく、生態的な特徴です。成魚の大きさは50から60cmにもなり、50cmを超える成魚を何歳か分からないほどの意味から“年ナシ”と呼び、これが釣り師のターゲットになるのです。

ところで、大阪府泉南市に茅渟(ちぬ)神社という神社があります。古くから、大阪の海は「茅渟の海」と呼ばれていたようで、チヌは現在も大阪湾に多く棲息しています。当然、この神社には釣り人が大漁祈願、海の安全そして魚の供養で多く訪れており、おみくじや絵馬も魚の形だそうです。

さて、私は大阪府内に居を構え10数年になろうとしています。九州で初めてチヌを釣って以来、すっかりハマってしまった一人です。大阪湾のとあるポイントに通い10回中3回ほど、しかも1匹だけ釣れば良い方で、野球と同じ3割くらいの打率です。

前編にも書きましたが、一生幸福にしてくれる釣りをこれからも当然続けます。ただ、茅渟神社に行ったことはないのも、早いうちに必ずお参りしなければと思います。打率も上がり、年ナシも釣れるようになれば……。でも、技術が伴わなければダメでしょうね！

完